

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目： 基盤研究(B)

研究期間： 2006～2008

課題番号： 18402032

研究課題名（和文） 中国の底辺階級に関する実証的研究

研究課題名（英文） An Empirical Study on Bottom Class in China

研究代表者

中村則弘 (NAKAMURA NORIHIRO)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：10192676

研究成果の概要：

チベット自治区、新疆ウイグル自治区、青海省、福建省、北京市における資料調査と聞き取り調査から、中国における底辺階級の具体的なカテゴリー、その人間的側面に着目した生活実態を明らかにした。あわせて、文化とエコロジーにもとづく新たな発展のあり方に関連し、少数民族地域の底辺階級において生存、調和の重視につながる価値意識が生きていること、そこにおいて渾沌と曖昧さが重要な意味をもつことを指摘した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2007年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
年度			
総計	10,900,000	3,270,000	14,170,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：底辺階級、中国、渾沌、曖昧さ、和諧社会、調和、エスニシティ

1. 研究開始当初の背景

(1)中国の発展の不均衡は指摘されていたが、底辺階級の生活実態に踏み込んだ調査研究はみられなかった。

(2)これまで幹部層・私営企業主層という特権階級の研究を蓄積してきた。それと対応させつつ、いわば逆の面から中国社会を捉えることとなる底辺階級の研究を実施する必要性が認められた。

(3)中国社会の底辺からみた変動の方向性、社会問題の根本要因を考える必要があった。

(4)東アジア社会の歴史的特性を踏まえつつ、

文化とエコロジーの面に視点を展開した実践的な発展のあり方を構想する必要があった。

2. 研究の目的

中国における底辺階級を対象とし、現地調査からその人間的側面に着目した生活実態の解明を行う。調査遂行にあたっては、都市と農村、定住者と移住者という大きな分類枠から、都市においては細民、零落者、レイオフ労働者、流入臨時労働者などを対象とし、農村においては僻地居住者、生活困窮者、漂

流的流入者などを対象とする。あわせて行政担当者、企業家、社会団体の担い手に対する現地調査を行い、行政・経済面の諸対策と底辺階級のかかわり、文化・エコロジー面での可能性を位置づける。その上で、底辺階級のなかから、新たな発展の担い手となり得る人間の特性とこうした発展を可能とする基礎的条件を明らかにする。

項目ごとにわけ、具体的に示すとすれば、下の通りとなる。

- (1)西欧近代、近代世界システムを問い直すことから、現地の歴史的特性を基盤とし、民衆の側に立った新たな発展の構想を示す。
- (2)中国における底辺階級の具体的なカテゴリーを明らかにする。
- (3)資料調査と聞き取り調査から底辺階級の人間的側面に着目した生活実態を解明する。
- (4)新たな発展の担い手となり得る人間の特性を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1)中国の地域特性と全体特性を把握するために、沿岸部・内陸部、北方・南方、都市・農村という区分に従った調査地を設定した。
- (2)調査地については、漢民族居住地と少数民族居住地という相違を反映できるように設定した。
- (3)チベット自治区、新疆ウイグル自治区、青海省、福建省、北京市の各調査地において、資料調査を実施した。
- (4)チベット自治区、新疆ウイグル自治区、青海省、福建省、北京市の各調査地において、有意に抽出した対象に対する直接面接による聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

- (1)底辺階級の側からは、行政官、医師、知識人が、生活を直接的に抑圧する存在と認識されていることが確認できた。
- (2)底辺階級にみられる直接的な生活破壊の状況については、医療と教育の問題が密接に関わっている可能性を明らかにできた。
- (3)底辺階級の一部には社会的格差に対する不満感情が広がっており、社会的衝突の可能性を示唆する意識がみられることが明らかとなった。しかし、その拡大を抑制する要因も少なからずみられていた。
- (4)農村の底辺階級については、出稼ぎや離村などとの関わりから、家族のあり方自体が崩壊している状況が広く確認できた。
- (5)チベット族、土族、回族、ウイグル族など少数民族と漢族との間では底辺階級をめぐる社会的状況に相違があることを明らかにした。
- (6)中国の底辺階級の特性は近代世界システムにおける周辺性と強く関連していた。しかし、問題としての現れ方は、大きく異なり、

民族や地域をめぐる文化と密接な関連をもっていたことを明らかにした。そこでは漢族、少数民族を問わず、宗教の問題、価値意識のあり方が重要な意味をもっていた。

(7)漢族においては、格差が拡大し、社会的弱者が切り捨てられる現実を「呪う」なかから、NGO や NPO と関連した社会変革への動きや仏教との関連から精神充足を重視する生き方が形成していることを確認できた。

(8)青海省のイスラム教徒においては、同教徒の連帯から底辺階級は排除されはじめていたことを解明した。あわせて、イスラム教指導者の権威が実施的に崩壊する事態が進行していたことを指摘した。

(9)チベット族の底辺階級については、生活そのものはイスラム教徒の場合よりも安定していた。これは民衆間の相互信頼と相互扶助が生きていた結果とみなすことができた。その背景には、チベット仏教にかかわる価値意識が大きな影響を及ぼしていることがあった。

(10)イスラム教徒とチベット仏教徒の対立が民衆の意識のなかにも根深く残存しており、こうしたことがらで少数民族の底辺階級間における連帯の形成を著しく阻害していたことを明らかにした。

(11)中国社会の最底辺層は、少数民族地域における女性、子供、高齢者というカテゴリーから明確に捉え得ることを確認できた。

(12)文化とエコロジーにもとづく新たな発展のあり方について、少数民族地域の底辺階級において生存、調和の重視につながる価値意識が生きていたことが明らかとなった。

(13)こうした価値意識においては、渾沌と曖昧さということが重要な意味をもっていたことを解明した。

(14)東アジアからの発展構想として、その鍵となる概念は渾沌と曖昧さであり、それは西欧近代において価値付与されたものとは全く異なる基盤に立っていることを指摘できた。

(15)渾沌と曖昧さと概念は、東アジアの支店からの社会科学のパラダイム転換にもつながり得ることを指摘できた。

(16)新たな発展の担い手となり得る人間の特性としては、都市の細民、そして女性というカテゴリーが重要である可能性を指摘することができた。

(17)底辺階級にかかわる問題解決について、底辺階級の問題からわれわれの生活を見直すことの必要性を提起できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

- (1) 東美晴, 旅行雑誌を読む—グローバル化と消費の観点から, 流通経済大学・社会学部論叢, 査読無, 19巻2号, 2009年, 27 - 51 頁
 - (2) 中村則弘, グローバリズムのもとでの中国の底辺階級—生活をめぐる新たな価値の模索のために, 査読有, 21世紀東アジア社会学, 創刊号, 2008年, 21-38 頁
 - (3) 首藤明和, 家族研究における関係的・実践的アプローチが秘める可能性, 査読有, 21世紀東アジア社会学, 創刊号, 2008年, 107-115 頁
 - (4) 唐燕霞, 都市基層社会の住民自治についての一考察, 山東省社区居民委員会の事例を中心に, 査読有, 北東アジア研究, 16巻, 2008年, 35 - 52 頁
 - (5) 東美晴, 上海における観光の選好性, 中国 21, 査読有, 29号, 2008年, 121 - 132 頁
 - (6) 首藤明和, 日本のハイブリッドモダンの特徴と課題—国家と市場による hybridism から, 生活の中の hybridism へ, フォーラム現代社会学, 査読有, 第5号, 2007年, 8 - 16 頁
 - (7) 中村則弘, 底辺階級の意識と実態からみる中国社会—和諧社会の議論への批判的検討, 査読有, 国際比較研究, 3号, 2007年, 3-25 頁
 - (8) 首藤明和, 現代中国の家族をどう捉えか—鍵を握る多様性の理解, 査読無, 第5号, 2007年, 112 - 121 頁
 - (9) 戴建中, 社会転型中的中国工人階級, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 1 - 18 頁
 - (10) 王頡, 中国農民的二次分化与家庭網絡化, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 19 - 25 頁
 - (11) 張玉林, 「離村」時代の中国農民家族—二重社会の歪み再考, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 26 - 31 頁
 - (12) 郁貝紅, 転換期における F 市身体障害者のマージナル化, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 32 - 47 頁
 - (13) 次仁央宗, 藏族文化的伝統思维与現代西藏社会經濟發展, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 48 - 53 頁
 - (14) 湯青川, 中国・青海省西寧市彭家鎮火東, 火西村移民扶養貧与的实例楽分析, 査読無, 日中社会学会ワーキングペーパー集, 第2号, 2007年, 54 - 88 頁
- [学会発表] (計 22 件)
- (1) 中村則弘, 擺脫東方主義与中国社会：全球化与東亜社会的新構想, 中央民族大学・日中社会学会共催 (中国研究的可能
 - 与課題：中日社会学學術研討会), 2009年3月27日, 中央民族大学
 - (2) 東美晴・根橋正一, 中国の移動に関する研究の現状, 中央民族大学・日中社会学会共催 (中国研究的可能与課題：中日社会学學術研討会), 2009年3月27日, 中央民族大学
 - (3) 陳捷, 東アジアの曖昧さと民間金融, Critical East Asian Studies Workshop, 2009年3月18日, 愛媛大学
 - (4) 中村則弘, 東アジアにおける曖昧さと『渾沌』—民衆意識からみる地域・民族, Critical East Asian Studies Workshop, 2009年3月17日, 愛媛大学
 - (5) 中村則弘, 世界における中国社会の研究動向—国際研究集会の状況から, 日中社会学会, 2008年12月13日, 神戸華僑会館
 - (6) 中村則弘, “渾沌”对社会變動的涵義：尋求擺脫“東方主義”的对中国社会變動研究的分析框架, “中国社会与中国研究”国際學術研討会, 2008年10月24日, 南京大学
 - (7) 首藤明和, 現代中国の家族・農村・移動, NIHU 現代中国地域研究プログラム主催 (早稲田大学現代中国研究所主幹校), 2008年9月27日, 早稲田大学
 - (8) 中村則弘, 器としてみる家族—東アジア・日本からの問い, 香港大学 (The School of Modern Languages and Cultures) 主催国際シンポジウム, 2008年9月19日, 香港大学
 - (9) 首藤明和, 近世被差別民の社会結合の分析と日本近代化の再考—「草場株」など郷を基盤とした社会結合に着目して, 香港大学 (The School of Modern Languages and Cultures) 主催国際シンポジウム, 2008年9月19日, 香港大学
 - (10) 首藤明和, 中国農村・農民問題と食糧危機—中国農村の現実から考える, 中国農村問題シンポジウム実行委員会主催 (名古屋大学環境学研究科共催), 2008年7月21日, 名古屋大学
 - (11) 中村則弘, Chaos and Value Consciousness in East Asia: To Construct a Harmonious Global Society, The 38th World Congress of International Institute of Sociology, 2008年6月27日, Budapest University
 - (12) 首藤明和, 分岐する現代中国家族—個人と家族の再編成, 中央民族大学・日中社会学会共催, 2008年3月27日, 中央民族大学
 - (13) 首藤明和, 中国家族における伝統的宗教実践の再構成, 比較家族史学会, 2007年6月17日, 神戸大学

- (14) 中村則弘, 和諧社会と中国の底辺階級, 日中社会学会, 2007年6月3日, 日本福祉大学
- (15) 首藤明和, 中国の底辺階級に関する実証的調査, 日中社会学会, 2007年6月3日, 日本福祉大学
- (16) 首藤明和, 「アジアのなかの日本・日本のなかのアジア」の存立構造とその課題, 2007年5月27日, 同志社大学
- (17) 戴建中, 社会転型中的中国工人階級, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学
- (18) 王韻, 中国農民的二次分化与家庭網絡化, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学
- (19) 張玉林, 「離村」時代の中国農民家族—二重社会の歪み再考, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学
- (20) 郁貝紅, 転換期における F 市身体障害者のマージナル化, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学
- (21) 次仁央宗, 藏族文化的伝統思维与現代西藏社会經濟發展, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学
- (22) 湯青川, 中国・青海省西寧市彭家鎮火東, 火西村移民扶養貧与の実例案分析, 日中社会学会, 2006年12月9日, 愛媛大学

〔図書〕(計 12 件)

- (1) 中村則弘, 『『苦海浄土』としてみるオルタナティブ—中国の底辺階級と社会意識の検討から』中村則弘・栗田英幸編『等身大のオリエンタリズム』, 明石書店, 2008年, 202-229 頁
- (2) 中村則弘, 「はじめに—全体構想と分析方法」中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化—新たな構想を求めて』, 明石書店, 2008年, 7-14 頁
- (3) 中村則弘, 「脱オリエンタリズムと近代化のせめぎあい」中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化—新たな構想を求めて』, 明石書店, 2008年, 19-41 頁
- (4) 中村則弘, 「渾沌と社会変動—中国にみる担い手の生活指針から」中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化—新たな構想を求めて』, 明石書店, 2008年, 195-224 頁
- (5) 中村則弘, 「東アジアからの発展の構想に向けて」中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化—新たな構想を求めて』, 明石書店, 2008年, 225-237 頁
- (6) 首藤明和, 「現代中国家族をどう捉えるか」首藤明和, 落合恵美子, 小林一穂編, 『分岐する現代中国家族』, 明石書店, 2008年, 15-29 頁
- (7) 首藤明和, 「漢人家族の『個人と家族』の再考に向けて」首藤明和, 落合恵美子, 小林一穂編, 『分岐する現代中国家族』, 明石書店, 2008年, 32-63 頁

- (8) 首藤明和, 「漢人家族の代親機能と老親扶養」首藤明和, 落合恵美子, 小林一穂編, 『分岐する現代中国家族』, 明石書店, 2008年, 152-182 頁
- (9) 首藤明和, 「現代中国家族の理論的理解に向けて」首藤明和, 落合恵美子, 小林一穂編, 『分岐する現代中国家族』, 明石書店, 2008年, 337-351 頁
- (10) 陳捷, 「中国における庶民金融の実態と変容—錯綜『伝統』と『革新』のはざままで」高橋基泰・松井隆幸・山口由等編, 『グローバル社会における信用と信頼のネットワーク』, 明石書店, 2008年, 107-130 頁
- (11) 唐燕霞, 「国有企業の民営化とコーポレートガバナンス—南京市の事例を中心に」石井健一・唐燕霞編『グローバル化における中国のメディアと産業』, 明石書店, 2008年, 38-63 頁
- (12) 唐燕霞, 「中国の産業と情報社会のゆくえ」石井健一・唐燕霞編『グローバル化における中国のメディアと産業』, 明石書店, 2008年, 349-360 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 則弘 (NAKAMURA NORIHIRO)
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号: 10192676

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

首藤 明和 (SHUTOU TOSHIKAZU)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号: 60346294
唐 燕霞 (TOU ENKA)
島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 80326404
東 美晴 (AZUMA MIHARU)
流通経済大学・社会学部・教授
研究者番号: 50347978
陳 捷 (CHIN SHOU)
愛媛大学・国際連携推進機構・准教授
研究者番号: 00380212